

# 韓国人日本語学習者の日本語アクセントの実相\*

- 大邱地域出身学習者の場合 -

李範錫\*\*

〈 Abstract 〉

## The Current State of Japanese Pitch Accent by Korean Learners : In Case of Learners from Daegu Area

In this paper, I will present the actual situation of the Japanese accent of the Japanese learner from the Daegu area. As a result, the following facts were revealed.

1) Unlike the Japanese learner who came from the Seoul area, the level of the syllable between the words became clear. However, while there are individual differences in the firing pattern of the Japanese accent between the three speakers, the Japanese accent type that is pronounced the same as the type is very low, and the accent pitch realization rate is low.

2) As a result of plural pronunciation, the pitch pattern is not generated in any certain pattern, And it was found to be arbitrary utterance Pattern.

3) As well as the pitches of the first syllable and the second syllable, such as [●●], [●●○] [●●○○] Patterns pronounced with the same pitch and accent types such as [○○●] were observed. These patterns do not exist in Japanese Accent Pattern, and they appear in all three speakers. It is the influence of the Daegu dialect accent type, which is the mother language, of the preceding study on the accent of the dialect. I was able to see through examples.

Field : Phonetics

Keywords : Pitch accent speaker, Japanese word accent speech, Pitch pattern

## 1. はじめに

今まで韓国人日本語学習者を対象とした日本語アクセントに関する研究は、複数行われている<sup>1)</sup>。これらの先行研究では主に日本語の共通語アクセントの発話生成パターンの傾向や誤用、そして知覚との相関関係などを究明している。

さて、先行研究の中でもアクセントの生成に関するテーマに注目してみると、殆どどの研究がソウル地域出身学習者をはじめ、単語ごとに定められている音韻論的アクセント体系を持っていないいわゆる無型アクセント方言地域出身学習者を対象としている。筆者も拙稿(2015)を通して次の節で示した方法によりソウル地域出身話者の日本語の単語アクセントの発話ピッチパターンの実相と生成に関わる要因を

\* 本研究は2019年度カトリック大学校支援研究費によるものである。

\*\*カトリック大学教授、日本語学

1) 金韓植(1996)、고혜정(2009)、/李敬淑・酒井真弓(2013b)・・・など

明らかにした。以下にその知見を簡略にまとめて示す([付録]〈表0〉参照)。

ソウル地域出身日本語学習者の日本語アクセントの発話実相は、①音節間メリハリが少なく全体的に平坦に発話される傾向がある。②仮に音節間高低差をつけて発話した場合でも発話するたびに異なった音調で実現される傾向が強く、言わば恣意的発話パターンであった。具体的な例を挙げるならば、「●●●●」のように音節間高低変化がないか、「●●●●」のように上下の高低差が曖昧なピッチパターン。なおかつ「●●●●、●●●●」のような日本語のアクセント型に存在しない音調型まで多様なピッチパターンで実現され変化に富んだ実相をみせた。そしてこのようなピッチパターンの出現は学習者の母語の特徴が反映された結果と見做した。つまり、繰り返すがソウル地域出身日本語学習者の場合は、母語が周知のように単語ごとに音韻論的ピッチアクセントを持たないいわゆる無型アクセントであり、普段の言語生活の中でも音節間相対的な高低差をつけて発話することに慣れていないのである。それ故に、音節間高低差の少ない曖昧かつ平坦な発話音調が出現される可能性が高い。同時に発話するたびに異なった音調で実現されても構わない、言わば恣意的な発話が現れたとの知見を述べた。

さて、上述したように先行研究の大部分が無型アクセント方言地域出身話者であり、例えば母語が音節間相対的な高低差を有する地域出身学習者のみを対象とした研究は管見の限り見当たらない。そこで、本稿では学習者の母語が単語の音節間音調に高低差が存在する大邱地域出身学習者を対象に、日本語アクセントの発話実相を明らかにしたい。特に当該地域話者の場合は母語が高低による音韻論的アクセントを有するので普段の言語生活の中で高低のめりはりの付与に慣れている可能が高く、無型アクセント方言地域出身話者とは異なった実相が予想される。

一方、研究の方法は次の節で具体的に示すが、調査項目や学習者の単語アクセントの発話音声の収集方法などについては、ソウル地域出身話者を対象とした拙稿(2015)と同一方法により検討を進めたい。

## 2. 調査及び研究の方法

韓国語を母語とする日本語学習者のみならず、外国人日本語学習者の場合は特別な例外を除くと、日本語の共通語アクセント(以下、日本語アクセント)を日本語母語話者と同様なレベルで使用できる話者は非常に稀なことであろう。故に、今までの大部分の先行研究で用いられてきた研究方法、とりわけ発話音声の収集方法の問題点を改善すべく、以下にその問題点や本稿の手法を示したい。

今までの先行研究で採用されたきた研究手法を見ると、大部分の研究が検討対象資料を1回分の発話音声データをもとに検討しているか、それとも、複数の発話音声データを対象とした場合でも、いずれもその場で連続した発話音声データを用いていた。このような音声収集方法から懸念される点は、特に1回分の発話データの場合は、該当学習者の発話実相の代表性が欠けていると思われるのである。すなわち、仮に上級レベルの学習者の場合でも、日本で言語形成期を過ごしていない限り日本語のアクセントを拾得している可能性は低く、常に一定のパターンで発話するとは限らない。言い換えれば、例えば3回発話したとき、3回ともに同じ音調で発話した場合もあれば、3回発話の中で1回目と2回目は中高型で、そして3回目は尾高型の場合も有りうるのである。また、3回発話の中で1回目は尾高型、2回目は中高

型、3回目は平板等々のようなパターンで産出される可能性をも抱えているのである。従って、1回分のアクセント発話音声資料の場合はその学習者の日本語アクセントの発話実相に代表性が欠けていると思われるのである<sup>2)</sup>。

以上のことから、学習者の日本語の単語アクセントの生成実相を明らかにするためには複数の発話データによる検討が求められるのであり、以下で示した方法により発話音声を収録した。

「**録音方法**」：まず、日にちを変えて発話音声を録音した。つまり、初日に録音を取った後、二日以上の間をおいてさらにもう一度録音をとる方法を用いた。なお、日ごとに計3回発話してもらった。従って、各々の単語を初日3回、2日目に3回で計6回の発話音声データを収集したことになる。

また、調査表の作成においても同一音節の単語を一列に並べて配置した調査表だけではなく、調査表の単語の配置を2音節語、3音節語、4音節語のようにランダムで配置した調査表を用意し、録音を取った。

「**調査項目**」：次の〈表1〉に示しように、2音節語~4音節語まで頭高型、中高型(2音節語は中高型がないので例外)、尾高型、平板型の各アクセント型別に5個の語単独発話項目(計60語)である。4音節語が計25個になったのは4音節語の場合は中高型が2種類あるからである。さらに、「例:馬もいる」のような短い単文を用いて助詞付き発話調査も行った。

〈表1〉 調査項目

	2音節語(計15個)	3音節語(計20個)	4音節語(計25個)
頭高型	雨,海,箸,…(5個)	涙,眼鏡,緑…(5個)	来月,毎日,小遣い…(5個)
中高型		卵,心,貴方…(5個)	平仮,名朝顔色,…(10個)
尾高型	花,馬,橋…(5個)	男,頭,鏡…(5個)	弟,妹,居眠り…(5個)
平板型	鼻,飴,姉…(5個)	南,車,名前…(5個)	友達,大学,お土産…(5個)

「**調査対象者**」：調査対象者は上記したように慶尚北道大邱地域出身の20代大学生(男性)3名である。被験者は3年以上の日本語学習歴をもっており、中級以上の日本語講座を履修した学習者である。なお、3名の話者は韓国語による普段の言語生活の中でも出身地域方言の抑揚を使っており、地もとの友人や家族との会話ではより当該方言に馴染む言葉を使っていることを確認した。

「**アクセントの判定とその基準**」：収録した音声資料は日本語の共通語母語話者1名<sup>3)</sup>と筆者が聞き取りを行ない日本語アクセントとの正誤および音調を確認した。なお、日本語のアクセントの場合は周知のように高低二段階で構成されている高低アクセントであり、アクセントの核(下がり目)の有無とその位置が重視される。しかし、このような特徴は「第1拍と第2拍は原則的に高さが異なる」という日本語のアクセント制約があるからこそ成立するものであり、当該学習者の発話では当てはまらない。その理由は、今回対象とした話者3名の実際の発話音調には例えば「●●○」「●●○○」ように日本語のアクセント型には存在しないアクセント相が存在した。従って、本稿ではアクセントの判定を「音節間の相対的高低差の相、下がり目の位置、そして、第1音節と第2音節の高低差の有無」の基準から行った<sup>4)</sup>。

2) 拙稿(2015)を引用した。なお、本稿で用いた調査方法と研究方法、それに一部の用語、語句は拙稿から引用していることをあらかじめ断っておきたい。

3) 現在大学で日本語ネイティブ講師として活躍している。

4) 一部の用語や語句は拙稿(2015)から引用した。

### 3. 調査結果及び考察

#### 3.1 ピッチ実現率

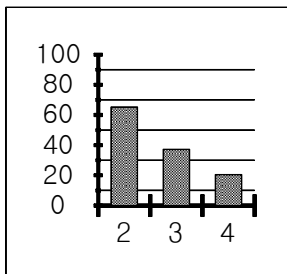
以下の節では被験者が発話した単語アクセントの音調が日本語のアクセント型とおりに発話されたかどうかそのピッチ実現率を検討し、各話者の日本語アクセントのピッチ実現の全体的な傾向をみる。

##### 3.1.1 各話者の日本語アクセントのピッチ実現について

まず、各話者の音節数別のピッチ実現の実相を検討したい。次の〈表1〉は前節で提示したアクセントの判定基準をもとに各話者の全体調査項目の音節数別ピッチ実現の平均割合を数字で表したものであり、〈図1〉～〈図3〉はその割合をグラフで示したものである。横軸は音節数を表し、縦軸は日本語の単語アクセント型通りに発話されたピッチ実現の割合を表す。

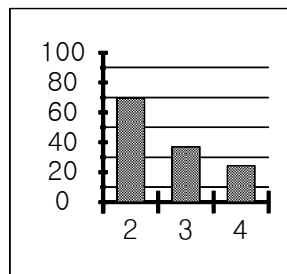
〈表2〉 各話者の音節数別ピッチ実現の割合(%)

	話者A	話者B	話者C
2音節語	65.2	69.6	65.3
3音節語	37.2	36.9	47.2
4音節語	20.4	24.4	31.5



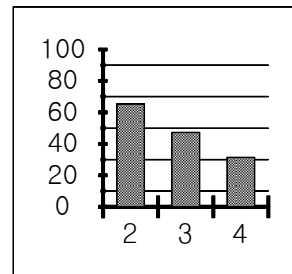
(話者A)

〈図1〉音節数別ピッチ実現



(話者B)

〈図2〉音節数別ピッチ実現



(話者C)

〈図3〉音節数別ピッチ実現

まず、音節数別に日本語のアクセント型と同じ音調で発話された割合をみると〈図1〉、〈図2〉、〈図3〉に示したように話者A、話者B、話者Cが非常に似通った結果を表している。

話者3名いずれも2音節語>3音節語>4音節語の順のように、音節数が多いほど日本語のアクセント通りに発話された割合が低いことが読み取れ、音節数とピッチ実現の間に一定の相関関係が認められるのである。その中で2音節語の実現率が3名話者ともに65%以上の高い実現率をみせているのが特徴的であるが、これは以下のような理由によるものと思われる。

つまり、2音節語の方が4音節語・3音節語に比べて日本語のアクセント型と同じ音調で発話された割合が相対的に高く現われたのは、①音節数が少ないことと、②同時に日本語の名詞アクセントにおいて2音節語の場合は語単語発話の場合「平板型」と「尾高型」が「○●」のよに同一アクセント型である。

従って、2音節語の場合は結果的に「●○」か「○●」の二者択一の結果に起因したのではないかと思われる。それに対して3音節語は3つのアクセント型が、4音節語の場合は4つのアクセント型を有するので2音節語よりも音節数が多く相対的にピッチの実現率が低くなったと見なされる。

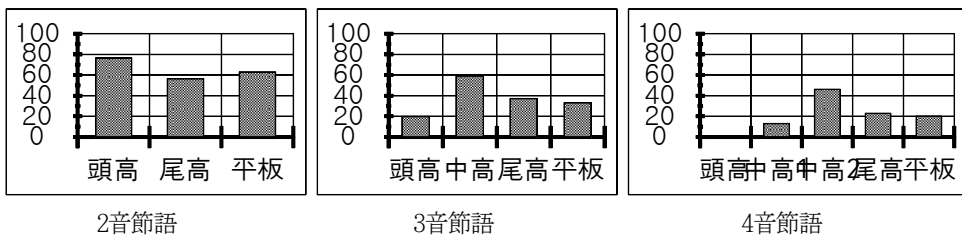
以上、各話者の日本語アクセントのピッチ実現率を音節別に検討してみた。その結果、今回は3名の話者という少人数調査による検討であることを断っておきつつ、一先ず言えるのは、単語の音節数が多いほどピッチの実現率が低く現われ、音節数とピッチの実現率の間に対応関係が認められる。その中で、2音節語のピッチ実現率が65%以上を占めてはいるものの、全体的には日本語の単語アクセント型と同じ音調で発話される割合は低いと言える。

### 3.1.2 アクセント型別ピッチ実現率

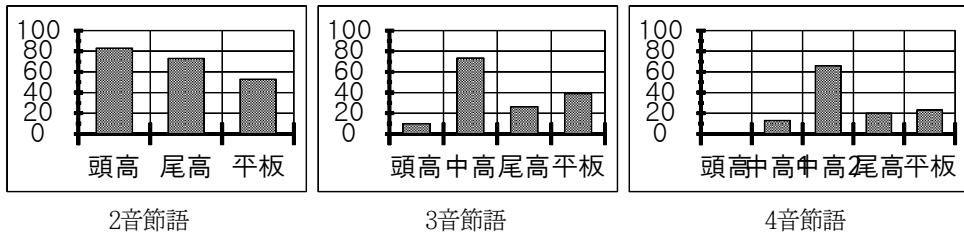
本節では各話者が発話したアクセント型別のピッチ実現率について検討する。〈表3〉は各話者のアクセント型別ピッチ実現率を表わし、そして〈図4〉～〈図6〉にアクセント型別ピッチ実現の割合をグラフで示した。グラフの中で「頭高型」に棒グラフが描かれていないのは日本語アクセント型通りに発話された例がなかったことを表わす。

〈表3〉 各話者のアクセント型別ピッチ実現率(%)

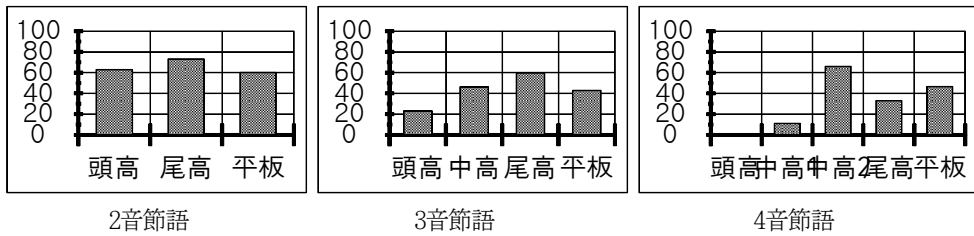
音節数	アクセント型	話者A	話者B	話者C
2音節語	頭高型	76.6	83.0	63.0
	尾高型	56.2	73.0	73.0
	平板型	63.0	53.0	60.0
3音節語	頭高型	19.8	09.8	23.0
	中高型	59.0	73.3	46.4
	尾高型	37.0	26.3	59.8
	平板型	33.0	39.0	43.0
4音節語	頭高型	00.0	00.0	00.0
	中高1型	13.0	13.0	11.0
	中高2型	46.0	66.0	66.0
	尾高型	23.0	20.0	33.0
	平板型	20.0	23.0	46.6



〈図4〉アクセント型別ピッチ実現 (話者A)



〈図5〉 アクセント型別ピッチ実現 (話者B)



〈図6〉 アクセント型別ピッチ実現 (話者C)

まず、各アクセント型別ピッチ実現の全体相をみると、2音節語においては話者ごとにアクセント型別の実相が異なっている。つまり、話者Aの場合は頭高型>平板型>尾高型の順、話者Bの場合は頭高型>尾高型>平板型の順、そして話者Cの場合は尾高型>頭高型>平板型の順で割合をみせ、3名の話者の間に共通の傾向が認められない。ただし、平板型と尾高型は語単独の場合は「○●」のように同一アクセント型なので話者ごとの実現率の大小の差異は調査項目の音節構造を含め、調査人数を増してより詳細な検討が必要であるが、今回の3名話者の検討に即して言うならば話者間の個人差によるものと推測される。

一方、3音節語と4音節語においては話者Aと話者Bの間にアクセント型別のピッチの実現率の実相が似ている。それに、話者Cの場合は4音節語のピッチ実現が話者A・話者Bと同様な傾向を示している。つまり、〈図4〉と〈図5〉の3音節語と4音節語における発話音調の実相をみると話者Aと話者Bはともに3音節語では相対的に中高型「○●○」で発話される傾向があり、4音節語では中高2型「○●●○」で発話される傾向が著しい。なお、〈図6〉の話者Cの4音節語の発話でも中高2型「○●●○」の実現率が相対的に高いのが認められる。

さて、このように話者3名の中に中高型音調が他のアクセント型に比べてピッチ実現率が相対的に高く現れたのは先行研究の結果よりその音声的背景がうかがえる。つまり、中東(2001)によると「韓国語日本語学習者だけではなく、外国人日本語学者に共通的に見られる特徴は後から数えて2番目にアクセントの核をおく発話である」との旨を述べている。これは発話された音調がまるで平仮名の「へ」の字のようなピッチパターンを描く中高型アクセント型で実現される現象を指す。このような先行研究での実例を例証として認めるならば、今回対象とした3名の話者においても単語の中間部分のピッチが高い中高型アクセントのピッチ実現に有利に作用したのではないかと思われる<sup>5)</sup>。」

一方、話者Cで見られる発話傾向としては2音節語の尾高型の割合が70%、平板型の割合が

5) 拙稿(2010)p167から再引用。

60%、そして3音節語の尾高型の割合が59.8%、平板型が43%の割合に達し、頭高型と中高型に比べて発話される割合が高い。それで話者Cの場合は全体的に「○●」と「○●●」の音調で発話する傾向があり、話者A・話者Bの発話ピッチパターンとは異なる。これについては後の3.2節で改めて追補するが、個人差の可能性を含め今後より詳細な検討が必要であろう。

次は3名の話者の発話に共通的に観察された特徴であるが、話者A・B・Cいずれも3音節語では他のアクセント型に比べて頭高型「●○○」で発話される割合が相対的に低いことと、4音節語においては頭高型「●○○○」で発話される割合が0%であることである。このように「頭高型」出現の割合が低い実相については先行研究の結果からその相関性があることがうかがえる。つまり、辻野(2010)によると当該方言の名詞アクセントの各アクセント型別の出現頻度について検討を行って次のような結果を明らかにしている。

「3音節語の場合は408個の名詞の中で24個の項目が[頭高型]で実現され「5.9%」の出現頻度をみせており、4音節語の場合は151個の名詞の中で7個の項目が[頭高型]で実現され「4.6%」の出現頻度を占める」と述べられている。

このような実相は当該方言地域出身話者の場合3音節語と4音節語の発話では[頭高型]で発話する可能性が低いという例証であり、本稿で対象とした話者3名の3、4音節語の発話でみられた[頭高型]への実現に干渉として作用したのではないかと思われる。

さて、本稿で対象とした3名の話者の発話の中で特定の項目において音節間高底差が明確かつ日本語のアクセント型と同じピッチパターンで発話された場合でも、それは該当話者が必ずしも日本語アクセントを習得または既知の状態が発話したとは認められず、たまたまそのように発話した結果と思われる。その理由は後の節で改めて述べるが調査項目の6回の発話の中で6回ともに同じ音調型で発話した例が少ないことと、それに加えて前節でも述べたように当該学習者の母語(大邱方言)では単語ごとに高低の配置による固有のアクセント型が存在し、そのような母語音調の特徴が干渉として働いた可能性が想定されるからである。

以上、3.1.1、3.1.2を通して各話者の音節数別、アクセント型別のピッチ実現率について検討した。その結果、単語の音節数が多いほどピッチの実現率が低く現われ、音節数とピッチの実現率の間に対応関係が認められる中で2音節語のピッチ実現率が65%以上を占めてはいるものの、全体的にみると日本語の単語アクセント型と同一音調で発話されたピッチ実現の割合は低いと言える。またアクセント型別のピッチ実現率においても3音節語と4音節語において中高型がやや優勢な実現率をみせている共通性はあるが、話者3名ともに日本語のアクセント型通りに発話される実現率は全体的に低い。

### 3.2 音調パターンの実相

前節でも述べたが外国人日本語学習者の場合は日本語のアクセントをすべて習得していない限り、日本語母語話者と同じレベルで使いこなすことはできない。言い換えれば、一般的に日本語学習者の場合は日本語のアクセントを習得していないので日本語のアクセント型とおりに発話することはできない。それに今までの調査結果や先行研究の知見からみても、いつもある一定の音調型で発話されず発話するたびにその音調パターンが異なる可能性が高いと見なされた。従って学習者の日本語アクセント発話の実相を分析するためには1回分の発話データでは実現される音調型に代表性が欠けている可能性が高いので、複数の発話データを基にその音調の実相を観察する必要がある。そこで、本稿では2節でも述べたように発話データを日にちを変えて計6回収録しており、日にちを変えた発話音調の様子を検討する。

つまり、1回目～6回目までの発話ピッチパターンをもとに複数発話間の音調にはどのような異動や特徴があるのか、その全体的な実相を検討したい。

さて、3名の話者の6回発話の音調を検討したところ、個別調査項目の発話音調の実相に個人差がある中で、いずれの話者もほとんどの調査項目の音調が6回ともに一定のパターンで発話されず恣意的であった。つまり3名話者ともに一部の項目を除くと発話するたびに異なったピッチパターンで実現される傾向をみせた。それで、ここでは話者Aと話者Bの例を代表としてとりあげて検討し、話者Cのピッチの実相は付録に示した。

次の<表4>～<表5>に話者A,Bの語単独発話6回分のピッチ実相を高低二段階の観点からアクセント記号で示した。記号「●」と「○」は音節を表し、「●」は高い音調、「○」は低い音調を表す。なお、以下の説明で必要に応じては高い音調の記号「●」をHで表し、低い音調の記号「○」をLで表すことにする。

<表4>話者Aの全項目のピッチ実相

	単語	1日目			2日目			
		1回	2回	3回	1回	2回	3回	
2音節語	頭高型	雨	●○	●○	●○	●○	●○	●○
		海	○●	●●	○●	○●	●○	○●
		箸	●●	●○	○●	●○	●○	○●
		窓	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	尾高型	夜	○●	○●	○●	○●	○●	○●
		馬	○●	○●	●●	●●	○●	○●
		花	●○	●●	●●	●○	○●	○●
	平板型	橋	○●	○●	○●	○●	○●	○●
		山	○●	○●	●●	○●	○●	○●
鼻端型	川	○●	○●	●●	○●	○●	○●	
	鼻	○●	○●	●●	○●	○●	○●	
	飴	●○	●○	○●	●○	●○	○●	
	姉	●○	●○	○●	○●	○●	○●	
3音節語	頭高型	犬	○●	○●	○●	○●	○●	○●
		眼鏡	○●○	○●●	○●○	○●○	○●○	○●○
		命	●○●	●○●	○●○	●○●	●○●	○●○
		涙	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
	中高型	緑	●○●	○●●	○●●	○●●	○●●	○●●
		花	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		火	●○●	○●○	●○●	●○●	○●○	○●○
		あなた	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
	尾高型	臭い	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		花	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		屋	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		心	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
平板型	卵	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
	仲間	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
	男	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
	頭	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
鼻端型	言葉	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
	鏡	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
	大人	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
	南	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
4音節語	頭高型	車	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		手紙	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		名前	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		前	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
4音節語	頭高型	毎日	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		小遣	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		中国	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		来月	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○



		名前	○●○	○●●	●●○	○●○	○●○	○●●
4 音 節 語	頭 高 型	毎日	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		小遣	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		中国	●●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
	中 高 一 型	来月	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		兄弟	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		朝顔	●●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
	中 高 二 型	色紙	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		お握り	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		飲物	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
	湖 雷	湖雷	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		平仮名	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		青空	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
	尾 高	一昨日	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		妹	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		弟	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
	平 板 型	一日	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		居眠り	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		足踏み	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
お土産	お土産	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	
	乗り物	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	
	大学	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	
友だち	友だち	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	
	鶏	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	

### 3.2.1 日にちごとの音調の実相

本節では各話者のピッチ実現率については問わず、日にちを変えて発話した計6回発話をもとに複数の発話間のピッチパターンにはどのような異動や特徴があるのか、その全体的な実相を検討したい。

各話者の具体的な実相を検討する前に3名の話者が発話した音調を検討した結果、まず、話者3名ともに2音節語~4音節語までの6回発話のいずれも音節間高低差に曖昧は発話はなかった。言い換えれば、日本語のアクセント型との一致に関わらず、各単語の発話音調が音節間明瞭な高低差によって実現されることが確認できた。このように音節間音調が明確な高低差で実現されたのは被験者の母語の影響と思われる。つまり、冒頭でも述べたように、被験者の母語である大邱方言の場合は、単語の発話音調において音節間高低差が存在し、単語アクセントに示差的機能を持っている。そのため、高低のピッチ付与に慣れており、そのような特徴が反映された結果と見なされる。次は、話者別具体的な発話音調の実相を検討してみたい。

#### 【話者Aの発話実相】

まず、**話者Aの場合である**。上記の〈表4〉の話者Aのピッチ実相をみると、1日目3回~2日目3回、計6回の発話の実現アクセント型が全回ともに同じピッチパターンで発話された項目は非常にすくないのが読みとれる。

つまり、2音節語から4音節語までの全項目の中で同じピッチパターンで発話された項目は、2音節語では3項目、3音節語では5項目、そして4音節語では4項目のみである。以下、より詳細な実相を検討してみる。

まず、2音節語の場合であるが「雨、窓、夜」の3項目が6回ともに「●○」型の音調で発話され、この場合は該当項目のもとのアクセント型（頭高型）とおりに実現されたことになる。そして、3音節語にお

いては「臭い、南、車、手紙、名前」の5項目が6回ともに同じパターンで発話されているが、次のような特徴的な実相を有している。つまり「臭い、南」の場合は両者ともに「○●○」のように言わば中高型で発話されている。ところが「南」の場合は日本語共通語（以下もとのアクセント）では平板型「○●●」であるが、当該話者の場合は中高型「○●○」の音調で発話しているのである。それに「車、手紙」の場合は「●●○」のように第1音節と第2音節を連続して同じ高さで発話しており、日本語のアクセント型には存在しない特異なピッチパターンで実現されているのである。そして、調査項目「名前」の場合は「○●●」のようにもとのアクセント型通りに平板型で実現されている。一方、4音節語の場合は「中国、兄弟、妹、弟、足踏」の5項目が同じピッチパターンで実現されているが、その中で「妹、弟、足踏」の場合は3項目ともに「○●●○」型で発話されており、「中国、兄弟」の2項目の場合は上記の3音節語の「車、手紙」と同様に日本語のアクセント型には存在しない「●●○○」型と、「●●●○」型のように第1音節と第2音節が同じ高さで実現されている傾向がある。

それでは何故いまの3音節語と4音節語で見られた特異なピッチパターンが現われているのか。これについては以下で改めて詳細に述べるが、とりわけ当該話者の母語(大邱方言)と関係があると推測される。

さて、今まで2音節語から4音節語までの計60個の調査項目の中で計6回の発話ともに同じピッチパターンで発話された項目について確認したが、それ以外の調査項目の場合は具体的にどのような特徴があるのか、2音節語の「箸」を例にその発話実相をより詳細に検討してみたい。〈表4〉の「箸」の例をみると1日目の1回目の発話では上下の高低差を付けない「●●」のように発話されており、2回目の発話では「●○」、そして3回目の発話では「○●」の音調で実現されている。それに、2日目の発話では1回目と2回目はともに「●○」のように「箸」固アクセント型である「頭高型」で正しく実現されているのに、3回目の発話では「○●」の音調で実現され、同じ項目の発話が3つのパターンで実現された結果を示しているのである。

このような発話実相は結果的に特定の定まったアクセント型で生成されず変化に富んだ音調で実現される特徴をみせていると言える。なおかつ、単語固有のアクセント型とは異なるにせよ、同じ分節音で構成されている「橋」と「端」の発話実相でもそれぞれ別の音調で発話され、発話するたびに異なってくる言わば恣意的な発話の例証ではなからうか。このような実相は2音節語の「箸」という特定項目だけではなく「箸」以外の項目や3音節語、4音節語の殆どどの項目においても同様な実相をみせているのが〈表4〉の話者Aの全項目のピッチ実相から確認できる。

#### 【音節数別ピッチ実現の具体的な実相】

次は上記の1日目3回～2日目3回、計6回ともに同じピッチパターンで発話された項目以外の項目の各音節数別ピッチパターンの実相を詳細に検討してみたい。

まずは、**2音節語における発話音調の実相である**。上記の「箸」の例でも確認されたように2音節語の語単独発話では「●○」型、「○●」型、「●●」型のように3種類のピッチパターンで現れ、発話するたびに音調型が変わっていく実相をみせた。それに、原稿紙面の制限のために〈表4〉には示してはいるが、助詞付きの発話を確認し結果、例えば「●○▷(花)、○●▷(犬)、○●▶(馬)、●●▷(花)、●●▶(橋)」のように5種類の音調型が観察された。この中で、日本語の単語アクセント型通りに発話されていない音調は、語単独では例えば「尾高型「○●」を「●○」型で、そして「頭高型「○●」を「○●」型で発話したことはさておき、音節間高低差を付けない「●●」型や助詞付き発話で現れた「●●▷」型と「●●

▶」のように第1音節と第2音節の音調が同じ高さ「HH」で発話される特異な音調相も現れた。

さて、今示したような「●●」型や「●●▷、●●▶」のような音調相の場合は「第1音節と第2音節は必ず高さが違う」という日本語のアクセントの規則に反するもので、日本語の単語アクセントには存在しない音調型である。なおかつ、この種の音調相は2音節語だけではなく、〈表4〉で確認できるように3音節語と4音節語でも複数の項目で観察されており、詳細は後ほど改めて述べたい。

次は、**3音節語の場合である**。上記の2音節語と同様に3音節語においても複数の音調型で実現されている。日本語の場合は周知のようにN音節の語にはN+1個のアクセント型が存在する。従って3音節語の場合は4種類のアクセント型が存在するが、当該話者の発話ではピッチパターンが多様である。つまり〈表4〉をみると、語単独の発話では「○○○、○●○、○●●」のような音調型の他に、「●●○」のような音調型と調査項目「花火、言葉、鏡、大人」で見られた「○○●」型まで5種類の音調型が存在する。また、上記したように、表には示さなかったが、助詞付き発話の音調型においても「○○○▷、○○●▷、○○●▶、●●○▷」の4種類の音調型が観察されて変化に富む実相をみせている。この中で日本語アクセント型とおり発話されていない例をあげると、例えば「頭高型」で発話されるべき項目を「○○○、○●●、○●●」のように発話した他に繰り返すが「花火、言葉、鏡…」などの項目で観察された「●●○、○○●」のような日本語アクセント型には存在しないまったく異なったピッチパターンで実現された例である。

次は4音節語である。上記の2音節語・同3音節語と同様に複数のピッチパターンで実現されていた。語単独発話で観察された音調型を全部示すと「○○○○、○●○○、○●●○」型の他に「○○●○、●●○○、●●●○」型まで多様である。この中で後者の音調型は日本語のアクセント型には存在しないが、特に「●●○○」と「●●●○」型の場合は、2音節語・同3音節語でも観察されたように第1音節と第2音節が連続して[HH]で発話された例である。さて、最後の「●●●○」型の場合は調査項目「中国」と「青空」において観察されたが、この2項目の場合はいずれも第1音節と第2音節が母音連続を形成しているいわゆる重音節構造の成している。つまり、前者の「中国[ちゅうごく]」の場合は、半母音「ゆ」と母音「う」が連続するいわゆる重音節構造を構成しており、「青空」の場合は母音「あ」と「お」が連続している。このような音節構造を이문규(2017)で提示された「上昇調で始まる2音節以上の語節は最初の語節は上昇調又は高長調で・・・実現される」と述べられていることに照らし合わせて考えると重音節構造をなしている項目の発話の聴解過程において「上昇高長調」の発話の響きがまるで3音節連続が「HHH」のような音調で発話されたかのように聞こえたものと推測される。ただし、より詳細な実相は的確な確認が必要があり今後の課題である。

さて、当該話者の発話音調に特異な点は上記したように2音節項目から4音節項目まで、「●●」、「●●○」、「●●○○」のように第1音節と第2音節の音調が同じ高さで発話される音調型が現れたことである。このような音調についてはのちほど改めて述べると上記で後回した。それでは何故「第1音節と第2音節は高さが必ず違う」という日本語の共通語アクセント規則に反する音調型が生成されたのか、その理由について以下検討してみたい。

これについては上記でもすでに簡略に触れたように当該話者の母語である大邱方言の特徴と結び付けることができる。つまり、이문규(2002)によると当該方言の2音節語～4音節語までの音調型に第1音節と第2音節の音調が同じ高さで発話される例として「나무[HH]、새우산[HHL]」を取り上げており、また「上昇調で始まる2音節以上の語節は最初の語節は上昇調又は高長調で、2音節では高調、3番目以下の音節では低調で実現される<sup>6)</sup>」と述べられている。それに、4音節語の場合は이문규(2017)において북두칠성

[HLL], 무지개색[HLL]の例があげられている。また、辻野裕紀(2010)においても大邱方言の音調型に [HH] 구름, [HLL] 이야기, [HLL] 콘크리트, のような実例をあげて第1音節と第2音節が連続して [HH] で実現される音調型が存在していると述べている。

一方、「言葉、鏡、大人」の項目で現れた「○○●」型のパターンも当該方言アクセントに実体を述べてられている先行研究の辻野裕紀(2010)において確認される例「LLH(早呷)」である。

従って、このような先行研究の例証に照らし合わせて考えると、当該話者の日本語の単語アクセントの発話で観察された[●●]、[●●○]、[●●○○]、[○○●]のような音調型の実現もそのような母語の特徴が反映された結果とみなされる。なお、第1音節と第2音節の音調が同じ高さで発話される音調型は本稿で調査対象した話者3名に共通的に観察されたことをあらかじめ示しておきたい。

### 【話者Bの発話実相】

次は話者Bの場合である。音節および各々の調査項目の発話音調の詳細な実相は異なっているものの、日にちによって発話された音調型の異同においては上記の話者Aとあまりかわらない様子である。つまり、〈表5〉をみてわかるように、1日目から2日目を通して全部同じピッチパターンで発話された項目は、2音節語の場合は「雨、窓、夜、花、川、飴」の6項目、3音節語では「眼鏡、緑、卵」の3項目、そして4音節語では、「兄弟、妹、弟、乗り物」の4項目のみである。これらの6回とも全部同じピッチパターンで発話された項目の詳細な音調型を検討してみると次のようである。

まず**2音節語**の「雨、窓、夜」の場合は「●○」型の音調で発話され、該当項目のもとのアクセント型(頭高型)通りに発話されていると、そして「花、川」の項目も「○●」のように語単独発話時のアクセント型通りに発話されている。ところが、「飴」の場合はもとのアクセント型が「○●」であるが、当該話者は「●○」のように頭高型で発話し、異なった音調型で実現している。次に「眼鏡、緑、卵」の**3音節語**においては3項目が6回ともに同じパターンで発話されているが、この中で「卵」の場合はもとのアクセント型である中高型「○●○」で発話されているが、頭高型である「眼鏡、緑」の場合は中高型「○●○」型で発話している。そして**4音節語**の「兄弟、妹、弟、乗り物」の4項の場合は「兄弟」が「●●○○」型、「妹、弟」が「○●●○」型、それに「乗り物」の場合は「○●●○」型で発話され、いずれももとのアクセント型とは異なったピッチパターンで実現されている。

以上、今まで検討した1日目から2日目を通して全部同じピッチパターンで発話された項目はすくない。なお、仮に同じピッチパターンで発話された場合でも、日本語の単語アクセント型通りに発話されない場合が存在している。それにその他の音節別項目の1回目から6回目までの音調相も日にちごと、発話ごとのピッチパターンが一致せず、概して上記の話者Aとあまりかわらないことが確認された。

### 【音節数別ピッチ実現の具体的な実相】

次は、1日目3回~2日目3回、計6回ともに同じピッチパターンで発話された項目以外の項目の具体的な実相について検討してみたい。

〈表5〉をみると**2音節語**の語単独発話では「●○」型、「○●」型、「●●」型のように3種類のピッチパターンが存在し、語単独発話では例えば調査項目「馬」の場合はもとのアクセント型が「○●」のように「尾高型」であるが、1日目の3回の発話と2日の1回、2回の発話では「●○」型に発話している。そして「頭高型」である調査項目「海、箸」では「○●」型か「●

6) 原稿のハングル内容を筆者が日本語に訳した。

●」型で実現されている。なおかつ、話者Aの発話でも観察されたように同じ分節音で構成されている「橋」と「端」の発話実相でもそれぞれ別の音調で発話されるなど大部分の項目が発話するたびに異なったピッチパターンで実現され、上記の話者Aと同様に恣意的実相をみせていた。

なお、助詞付き発話<sup>7)</sup>の音調型においても「例えば「●○▷)、○●▷、○●▶、●●▷)、」のように4種類の音調型が観察された。同時に「●●」と「●●▷」のように第1音節と第2音節の音調がの同じ高さ「HH」で発話される音調型が現れ、2音節の場合は話者Aと酷似の実相をみせている。

次は3音節の場合である。3音節においても上記の2音節語と同様に多様な音調型で実現されている。〈表5〉をみると、「●○○、○●○、○●●」のような音調型の他に、「●●○」のように日本語アクセント型に存在しないピッチパターンまで複数の実相をみせているのが読みとれる。

日本語アクセント型に存在しない誤実現音調は「頭高型、中高型、尾高型、平板型」の全アクセント型で現われているが、この中で「臭い、心、言葉、鏡」などの項目で見られる「●●○」のように第1音節と第2音節の音調がの同じ高さ発話される特異なピッチパターンは、次の2音節語と4音節語でも見られもので後ほど説明を加えたい。

4音節語であるが、上記の2音節語と同3音節語と同様に多様なピッチパターンで実現されていた。語単独発話から生成された音調型を全部示すと「○●○○、○●●○、○●●●」型、さらに「●●●○」と「●●○○」型のように多様である。この中で「●●●○」で示した例は前述した話者Aと同一項目「ちゅうごく(中国)」で現れた音調型であり、話者Aと同様な現象(第1音節の「ちゅ」と第2音節の「う」を1音節で発話)であり、またそのような音調型の出現も同一要素に起因していると思われる。なお、「●●●○」を含めて「●●○○」のように第1音節と第2音節の音調がの同じ高さ「HH」で発話される特異な音調型が観察された例をみると「来月、兄弟、雷、平仮名、大学」の項目で観察されるが、このようなピッチパターンの生成をもまた前述した話者Aと同様な現象であり、当該話者の母語の干渉に起因して生じたものと見受けられる。

今まで、話者Bの2音節から4音節までの音調相を検討してみたが、1日目3回と2日目3回、計6回の発話において特定の同じピッチパターンで発話された項目は非常に少ない。結果的1日目から2日目を通して全部同じピッチパターンで発話された少数の項目を除くと、発話するたびにピッチパターンが変わる実相をみせていると言える。

以上、日にちをかえて発話した話者Aと話者Bの各音節別ピッチパターンのを見極めつつ、全体的な実相のを検討した。

その結果、発せられたピッチパターンの詳細な形状は両話者の間に個人差が認められたが、1日目の3回発話、2日目の3回の計6回発話の様子はある特定のアクセント型の音調で実現されず、発話するたびにピッチパターンが変わっていくいわゆる恣意的発話音調の実相をみせていることが確認できた。このような実相は前述した2節で予想した通りの結果である。つまり、一般的に日本語学習者の場合は、日本語のアクセントを完全に拾得しているか、それとも日本で言語形成期を過ごしていない限り、日本語母語話者と同様のレベルで発話すること

7) 原稿紙面の制限のために〈表5〉には示さず、助詞付きの発話の確認結果のみ示す。

はできない。それ故に発話するたびに音調パターンが変わる可能性が高いと見なされたことの例証と思われる。

#### 4. おわりに

以上、大邱方言地域出身日本語学習者を対象に日本語アクセントのピッチ実現の実相を複数の発話データをもとに検討した。その結果、3人の被験者の結果に即して言うならば以下のような知見が言える。

1) まず、音節別そしてアクセント型別のピッチ実現率を検討したところ、単語の音節数が多いほどピッチの実現率が低く現われ、音節数とピッチ実現率の間に対応関係が認められた。その中で日本語の単語アクセント型と同一音調で発話される割合が全体的に低かった。また、アクセント型別のピッチ実現率においても3音節語と4音節語において中高型がやや優勢な実現率をみせている共通性はあるが、著しい割合ではない。ただし、このように中高型がやや優勢な実現率をみせているのは3.1.2節で述べたように先行研究を通して伺うことができる事項で、外国人日本語学者に共通的に見られる「へ」の字型ピッチパターンを描く特徴の現れと見なされる。

2) 日にちをかえた計6回の複数の発話では、発せられたピッチパターンの詳細な形状には個人差があるが、計6回発話のピッチパターンはある一定の音調型で発話されずに多様な音調型で実現された。このような実相は当該方言地域出身学習者の場合は、日本語の単語アクセントを発話する際、発話するたびにその音調型が変わっていくことを示すものであり、結果的にはいわゆる恣意的に発話されることの例証とみなされる。

3) 実現されたアクセントのピッチパターンには日本語のアクセント型に属する音調で発話されたことはさておき、3名話者ともに[●●],[●●○],[●●○○]のような第1音節と第2音節が同じ高さで発話される特異な音調型をも現れた。このようなパターンは日本語アクセント型には存在しない音調型であり、本稿で対象とした3名話者の母語である大邱方言の単語アクセント型に存在することが先行研究の実例で確認される。故にそのような母語のアクセント型が反映されたことと見受けられる。

4) さらに、音節間ピッチの実相では、発せられた個別項目のピッチパターンの詳細な形状は話者によって異なって個人差が認めれるが、発話時の音節間の高低差は明瞭に実現された。

これまた話者の母語である大邱方言単語アクセントの音調と相関関係あると思われる。つまり、当該大邱方言の場合は周知のように単語アクセントに示差的機能を持っており、単語の音節間音調に高低差が**存在するので**、当該地域出身話者の場合は普段の言語生活の発話で高低のめりはりの付与に慣れている可能性高いからであろう。

本稿の結びとして上記の大邱方言地域出身日本語学習者の結果を踏まえながら拙稿(2015)を通して得られたソウル地域出身話者の日本語アクセントの発話実相について以下のような知見を簡略にまとめて付け加えおきたい。

大邱方言地域出身日本語学習者のソウル地域出身学習者は、いずれも日本語の単語アクセントを的確に学習していない限り、一定のピッチパターンで発話できず、発話するたびにピッチパターンが変わっていくいわゆる恣意的に発話なる可能性が高い。

なお、両者ともに母語の特徴が反映されるのが観察される。つまり、単語ごとの高低のアクセント体

系を持っていないソウル地域出身学習者の場合は音節間の高低の差のすくない音調が、それに単語ごとの高低のアクセント体系を持っている大邱方言地域出身日本語学習者の場合は単語の音節間高低差を明瞭につけて発話する傾向や一部項目では大邱方言の単語アクセント型で見られる音調型が観察された。

### 【参考論文】

- 김한식(1996) 「韓國人學習者の 日本語アクセント 発音傾向 및 教育方案」 『日本語文學』 2 韓国日本語学会 pp.29-49
- 고혜정(2008) 「초급학습자의 일본어 악센트 지각에 관한 일고찰-음향음성학적 관점에서-」 『日本言語文化』 13 日本言語文化学会 pp.25-45
- 고혜정(2009) 「일본어학습자의 발화에서 보이는 일본어 악센트 피치패턴」 『日本言教育』 47 pp.59-72
- 양나임(2010a) 「초급 일본어학습자의 일본어 악센트 발음 및 청취경향」 『日本語文学』 46 韓国日語学会 pp.51-79
- 辻野裕紀(2010) 「일본어동경방언과 한국어 대구방언이 음조에 대한 악센트론적 고찰」 『日本学報』 韓国日本学会 pp.253-262
- 이문규(2002) 「대구방언과 안동방언의 비교연구」 『語文学』 77 한국어문학회 pp.101-149
- 이문규(2017) 「형태소 성조형태의 중심의 국어성조론」 한국문화사
- 閔光準(1989) 「韓國語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」 『日本語教育』 68 日本語教育学会 pp.175-190
- 中東靖恵(2001) 「単語読み上げにおける韓国人日本語学習者のピッチ実現」 『日本語教育』 109 日本語教育学会 pp.80-89
- 李範錫(2004) 「無型アクセント言語に見られる韻律的特徴」 『日本語学研究』 11 韓国日本語学会 pp.83-96
- 鄭樹漢(2009) 「ソウル方言を母語とする日本語学習者の日本語アクセントの生成と知覚」 『日本語学研究』 26 韓国日本語学会 pp.217-234
- 高慧禎(2010) 「韓国人における日本語アクセントのピッチ実現と知覚に関する実験研究」 『日本言語文化』 16 韓国日本言語文化学会 pp.25-45
- 李範錫(2010) 「韓国人日本語学習者の日本語アクセントの生成におけるピッチ実現の実相」 『日本語学研究』 29 韓国日本語学会 pp.161-174
- 高橋恵利子(2011) 「韓国人日本語学習者のアクセントの知覚と生成」 『日語日文学研究』 78 韓国日語日文学会 pp.60-79
- 李敬淑・酒井真弓(2012) 「韓国人日本語学習者の日本語アクセントの生成及び知覚」 『日語日文学研究』 83 韓国日語日文学会 pp.322-346
- 李敬淑・酒井真弓(2013a) 「発音および知覚に関する縦断研究」 『日本学研究』 38 壇国大学日本研究所 pp.319-344
- 李敬淑・酒井真弓(2013b) 「韓国人日本語学習者のアクセント生成に及ぼす語頭音とモーラ数の影響」 『日本語教育研究』 26 韓国日語教育学会 pp.59-73
- 李範錫(2015) 「韓國人學習者における日本語アクセントの実相 -母語の影響の観点から-」 『日本語学研究』 46 韓国日本語学会 pp.75-95

[付録]

〈表0〉 ソウル地域出身話者のピッチ実相

	単語	1日目			2日目			
		1回	2回	3回	1回	2回	3回	
2拍語	頭高型	雨	●○	●○	●○	●●	●●	○●
		海	●○	●○	●○	●●	●●	○●
		箸	●○	●○	●○	●●	●●	○●
		窓夜	●●	●○	●○	●●	●●	○●
	尾高型	馬	●●	○●	●●	●●	○●	●●
		花橋	●○	●●	●○	●●	○●	●●
		山川	●○	○●	○●	○●	○●	○●
	平板型	鼻	●●	○●	○●	●●	○●	○●
		飴姉端犬	●○	●○	●○	●○	○●	○●
3拍語	頭高型	眼鏡	●○○	●○○	●●●	●○○	●○○	○○●
		命	●○○	○●○	○●○	●○○	●○○	○●○
		涙	○●○	●●●	●●●	○●○	○●○	●○○
		緑	○●○	●●●	●●●	○●○	●●●	●●●
	中高型	あなた	●●●	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		臭い	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		花屋	○●○	●●●	●●●	○●○	●●●	○●○
		心卵	○●○	●●●	●●●	○●○	●●●	○●○
	尾高型	仲間	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		男頭	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		言葉	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		鏡	●●●	○●○	○●○	●●●	○●○	●●●
	平板型	大人	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		南車	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		手紙	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		名前	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
4拍語	頭高型	毎日	●○○○	○●●●	○●○○	○●○○	●●●○	●○○○
		小遣	●●●●	●●●●	●●○○	●●○○	●●○○	●●○○
		中国	●○○○	●●○○	●●○○	●○○○	●○○○	●○○○
	中高型	来月	●●●●	○●○○	○●○○	●●●●	●○○○	●○○○
		朝顔	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		紙お握り	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		飲物	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
	尾高	湖雷	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		平仮名	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		青空	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
	平板型	妹弟	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
		お土産	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○
乗り物		○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	
大学	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○		
	友だち	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	○●○○	

〈表6〉話者Cの全項目のピッチ実相

話者C	単語	1日目			2日目		
		1回	2回	3回	1回	2回	3回
2音節語	頭高型 雨海箸窓夜	●○ ○● ○● ○● ●○	●○ ●○ ●○ ●○ ●○	○● ○● ○● ○● ○●	●○ ○● ○● ○● ●○	●○ ○● ○● ○● ●○	●○ ○● ○● ○● ●○
	尾高型 馬花橋山川	○● ●○ ●○ ○● ○●	○● ○● ●○ ○● ○●	●○ ○● ○● ○● ○●	○● ○● ○● ○● ○●	○● ○● ○● ○● ○●	○● ○● ○● ○● ○●
	平板型 鼻飴姉端犬	○● ○● ○● ○● ○●	○● ○● ○● ○● ○●	○● ○● ○● ○● ○●	○● ○● ○● ○● ○●	○● ○● ○● ○● ○●	○● ○● ○● ○● ○●
3音節語	頭高型 眼鏡 命涙緑花	○●○ ●○○ ○●○ ○●○ ○●○	○●● ●○○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●● ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●● ○●○ ○●○ ○●○ ○●○
	中高型 あなた 臭い屋 心卵	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○
	尾高型 仲間 男頭 言葉 鏡	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○
	平板型 大人 南車 紙前 手名	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○
4音節語	頭高型 毎日 小遣 中国 来月 兄弟	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●
	中高一型 朝顔 紙握り お飲物 果物	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●
	中高二型 湖雷 平仮名 青空 一昨日	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●
	尾高型 妹弟 一日 居眠り 足踏み	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●
	平板型 お土産 乗り物 大学 友だち 鶏	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●	○●○● ○●○● ○●○● ○●○● ○●○●

〈 요지 〉

韓國人日本語學習者の日本語アクセントアクセントの実相  
-大邱地域出身 學習者の 경우-

本稿에서는 大邱方言地域出身日本語學習者を 対象으로 日本語アクセント實現에 대한 実相을 複数の 発話データを 중심으로 検討했다. 그 결과, 1) 拍数別, アクセント型別の 피치實現率을 検討 한 결과 単語의 音節수가 많을수록 實現率이 적게 나타나, 音節수와 피치實現率間에 対応關係가 있는 가운데, 日本語単語アクセント型和 同一音調로 発話 되는實現率은 매우 낮게 나타났다. 2) 낱자를 달리한 複数發話에서는 피치 패턴의 詳細한 形状에는 個人差가 있지만, 計 6회의 發話의 피치 패턴에는 一定 한 音調型으로 發話 되지 않고 多樣 한 音調型으로 實現 되었다. 3) 낱자를 달리한 複数發話에서는 피치 패턴의 詳細한 形状에는 個人差가 있지만, 計 6회의 發話의 피치 패턴에는 一定 한 音調型으로 發話 되지 않고 多樣 한 패턴으로 實現 되었다. 이러한 実相은 当該話者가 日本語의 個別 単語アクセント를 發話 할 경우, 發話 할 때마다 音調型이 바뀌 可能性을 나타낸 것이며, 結果적으로는 소위 恣意的으로 發話 된다는 것의 例證으로 여겨진다. 4) 발화된 アクセント 패턴 중에는 3名話者 모두에게서 [●●],[●●●],[●●○○]와 같이 第1音節과 第2音節이 같은 높이로 發話 되는 特異 한 音調型도 나타났다. 이러한 패턴은 日本語アクセント型에 存在 하지 않는 アクセント型이며, 本稿에서 対象 한 3名の 話者の 母語인 大邱方言의 単語アクセント型에 存在 하는 것이 先行研究의 实例에서 確認되었다. 따라서, 그러한 母語의 アクセント型이 反映 되어 나타난 것으로 여겨진다. 4) 音節間 피치의 実相의 詳細 한 形状은 話者間에 個人差가 있으나, 単語アクセント의 發話時 音節間의 高低差가 明瞭 하게 實現 되었다. 이 또한 単語에 高低アクセント 体系를 가지고 있는 話者の 母語인 大邱方言単語アクセント의 音調와 相關關係 있다고 사료된다.

논문분야 : 음성학

키워드 : 고저アクセント 지역 출신 화자, 일본어 공통어アクセント의 발화, 피치 패턴

■ 이범석(李範錫)

가톨릭대학교 교수

leebsy@catholic.ac.kr

- 投稿日 : 2019년 6월 30일
- 審査開始 : 2019년 7월 17일
- 審査完了 : 2019년 8월 8일
- 掲載確定 : 2019년 8월 9일